翻訳(3)　　トマス・ハワース著

チャールズ・レニー・マッキントッシュ

― 建築の内なるリアリティ(その2) ―

横川善正

マッキントッシュによってデザインされた家具のなかで、もっとも議論を巻き起こしたものは間違いなく椅子であり、彼はそれを既存の秩序に対する不満の表明手段として用いた。マッキントッシュの友人であり仲間でもあったハーバート・マックネアといっしょにアーガイルシャーの田舎を散策していたとき、そのことについて彼は私に次のように説明した。

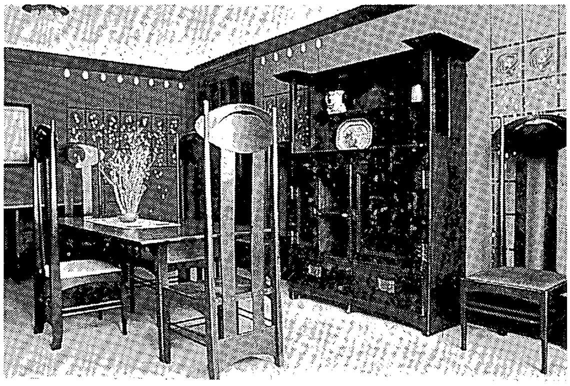
彼らは当時流行の家具の写真にトレーシングペーパーを置き、実物とはおよそ異なった新しい形の実験をよくやったものであると。背もたれを引き伸ばし、肘懸けを広げ、桟に厚い繰り型を施し、あるいは布地にステンシルを刷り込み、さらに真珠貝とか象牙の象眼などを取り入れた。メインズ・ストリートにあった自身のフラットのためにマッキントッシュは、どっしりとした箱型の袖椅子をデザインした。薄い座張りのあるこの椅子は、イギリスの住宅を悩ませた隙間風から実にうまく守ってくれるはたらきをした。私がサウスパーク・アヴェニュー78番地のデヴィッドソン宅を訪れたとき何度かこの椅子に座ってみたが、その保護性と比較的どっしりとした感触はとてもよかった。それはちょうど木の外套に包まれたようで、部屋の他からは隔離された気分にさせるに十分であった。

マッキントッシュの卵型にデザインされた笠木のあるハイバックチェアは、樹をかたどっており、上方へとみなぎる生命力を象徴的に表現したものである(写真①)。その型の一つとして、翔ぶ鳥を表わすものが、三日月状にくり抜かれている。卵型の笠木のついたものはこの他には二種類だけだが、そこにはさらに精妙な仕掛けが施されている。取りはずせるようになったハート型パネルに、その構図を面白くするために染色あるいはステンシルの入った布地で覆われている。これらの椅子は単独で置かれても、あるいは槇　文彦の設計した東京のオーストリア大使館にあるような彫刻的内容をもたせた1対の作品としても、あるいはマッキントッシュがメインズ・ストリートやサウスパーク・アヴェニュー78番地のためにデザインしたような食卓テーブルのそばに置くことも出来た。

床から53インチ、いやそれ以上ある極端に高い背もたれのついたこの椅子は、あきらかに不均衡さからくる不利があるにもかかわらず、これはマッキントッシュとフランク・ロイド・ライトのみによって採用された意匠の特長であったように思われる。マッキントッシュの最初の卵型の笠木が現れたのは1897年のアーガイル・ストリート・ティールームにおいてであった。背の高いラダーバックは18世紀の農家の椅子に起源し、アメリカではシェーカー教徒によって好まれた類のものであった。こうした笠木のついた椅子はとても軽やかで常に洗練されている。枠材は、脚部の角ばった面とりが、頭の方では筒状となり、引き伸ばされ、優雅なかたちを保ちつつ、卵型の頂部は航空力学的にも叶った優美な形態をもって、フレーム全体に流れている。

ほかでも見てきたように、ダイニングテーブルの周りに集められたハイバックチェアは、ある種の親密さと密やかさに包まれた特殊な雰囲気を醸しだし、実際、部屋のなかにある

もう一つの部屋空間といった感じだ。我々が推測出来ることといえば、マッキントッシュがこうした効果をよくわきまえ、意図的にデザインしたということである。メインズ・ストリートにあった彼自身のダインニングルームを描いた絵には、たった2脚のハイバックチェアが載っているだけである。しかも食堂用テーブルの両端に極めてフォーマルに配置されている。1940年代のサウスパーク・アヴェニュー78番地にあったダヴィドソンの家族との夕食の思い出といえば、実はローバックチェアにまつわるものである。これによって大変くつろいだ雰囲気が醸しだされた。一方ハイバックチェアのほうは壁際に立て置かれていた。



写真① サウスパーク・アヴェニュー78番地
ダイニングルーム、C.R.マッキントッシュ
1906年・グラスゴー

しかしながら、マッキントッシュだけがハイバックのダインニングチェアを発展させていったのではなかった。C.F.A.ヴォイジーは1900年に自身の家、ザ・オーチャードでとても上品で伝統的なものを使っていたし、フランク・ロイド・ライトはこれまたイリノイ州、カンカキーにあるR.ハーレイ・ブラッドレイ・ハウスのダイニングルームで、よりがっしりした作りのハイバックを取り入れていた。これらは、厚目で矩形の笠木から下は、背もたれ部に布地を張ったものであったらしい。イリノイ州、スプリングフィールドの1903年にできたスーザン・L.ダナハウスは、1908年のロビー・ハウスの例とほぼ同じく、縦の桟を均等に並べた背もたれのある、ずっと重いダイニングチェアーが入っていた。これらはマッキントッシュのものと同じ高さだが、包み込むという感じが強調されていた。

私は1956年に、ウィスコンシン州タリースィン・イーストでライトと4、5日間過したことがある。マッキントッシュの若い頃のことや、私が持参した彼の小品展の写真についての話のなかで、ライトは1910年にC.R.アッシュビーに会うためにイギリスを訪問した際、話題のスコットランドの建築家には会えなかったと語った。また彼は、雑誌「ザ・ステュディオ」やドイツの美術雑誌をとうしてマッキントッシュの作品を知っていたにも拘らず、公刊された彼の仕事にたいして親しみをもったという事実は認めなかった。

1956年にはまた、カリフォルニア、バークレイの客員教授として私はチャールズ・グリーンとバーナード・メイベックを調査した。彼らについて、それまで何んら主要な調査も報告もされていなかったので、私はほとんど知識を持たなかった。両人とも年をとっていたので連絡は困難であったが、彼らによって設計された湾岸地域のほとんどの建物を検証した。アーツアンドクラフツの伝統にしっかりと根ざしたグリーン兄弟の作品は、特異な細部と優れたクラフツマンシップ、それに気候条件との生き生きした対応の結果そのものであった(写真②)。チャールズ・グリーンもバーナード・メイベックのいずれも、マッキントッシュのことに関して特にこれといった関心を示さなかった。もっとも、メイベックのほうはヒル・ハウスの暖炉のある書斎の写真を見せた時、そっけなく「これは暖炉じゃない」と言った。そして私に、彼特有の判然としないくもの巣のような線でもって暖炉を描いて見せた。

ライトとマッキントッシュという二人の重要人物を考える際、どちらの方が先取りして

いたかといった議論の成り行きは興味深いものとなるはずである。マッキントッシュのハイバックチェアの最初の写真が「ザ・ステュディオ」特別号に紹介されたのは1901年で、その記事のタイトルは「近代英国の住宅と装飾」であった。そこにはメインズ・ストリートのインテリアが掲載されていた。従って、1900年当時、ライトは既にハイバックについてしっかりとした実験を終えていたとはいえ、ダナ＆ロビー邸の個性的な重量感あふれるダイニングチェアは、1901年発行の「ザ・ステュディオ」のあとに産まれたことは間違いない。こうした問いは、実は学術的な関心からにすぎないのだが、少なくともこの場合、ライトは創作者というよりはむしろ追従者の立場にあった。むろん、両者はありふれた先例を利用しながら、個々において似たような結論に達したとも言えるのだが。

一般的に言って、ライトの初期の住宅インテリアには、粋で快適な土臭さがあった。私の調べてきた合衆国じゅうにある彼の多くの仕事は、スコットランド人の仕事を特徴づける、あの細部への洗練された生真面目さやきめ細かい感性とは全く異なるものであった。また我々は、マッキントッシュの最も注目すべき仕事が1896年から1906年の十年間足らずという、恐ろしく短い建築家歴に集中していたことを思い起こすべきである。一方、ライトのはなばなしい天才ぶりは、一生のうちの三期にも渡っている。彼は1867年、つまりマッキントッシュの一年前に生まれ、1959年に没する間際まで仕事を続けた。マッキントッシュはライトより30年も先の、1928年に没したのであった。

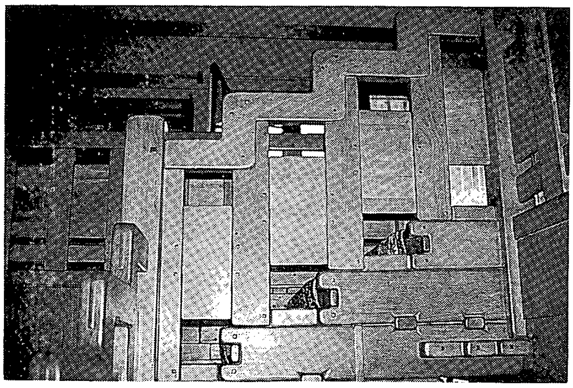
メインズ・ストリートのフラットの意義を、1980年代のデザイナー達があまりにも自明のこととして捉えるあまり、マッキントッシュ夫妻がこれによってもたらした革新的な原理は、容易に見過されがちであった。軽やかでゆったりとさりげなく調度された部屋は、それぞれの場所にふさわしいテキスタイルや美術作品といっしょに日用家具が注意ぶかく配置されていた。バウハウスの理念が広く普及し、近代スカンジナビアの影響が西欧に入り込むようになった30年代、40年代あるいは50年代におけるヨーロッパにおいてますますこうしたタイプの部屋が流行をみたのであった。

英国におけるウィリアム・モリスと彼のアーツアンドクラフツの仲間、そして合衆国のフランク・クロイド・ライトと同様、マッキントッシュは日常的に使うもののデザインの貧しさに深い関心を寄せていた。彼が1900年、はじめて妻マーガレットとウィーンを訪れ、当地での展示作品が多くの共鳴者を得たことを悦んだ。彼をはじめ、ジョセフ・ホフマンそしてゼセッションその他のメンバーとは、共通の目的を有する盟友となった。ホフマンはグラスゴーにマッキントッシュ夫妻を訪ね、1902年にはフリッツ・ヴェルンドルファーが続いて訪れた。両者とも、その機会を捉えて、同市にある美術大学の第一期工事とその他の仕事を見たものと思われる。そして、間違いなく、彼らはメインズ・ストリートのフラットで歓迎を受けたはずである。ホフマンはヴェルンドルファーという銀行家からの経済的支援を得ており、マッキントッシュは彼のためにウィーンでミュージックサロンを設計するといった間柄であった。1902年にホフマンはウィーン工房を設立し、その際、マッキントッシュをウィーンに招へいし、そこで仕事場と金属細工の工房を設立したいという話がなされた。この気持をくすぐる申し出に対し彼は結局辞退したのだが、これは彼のヨーロッパ大陸で得た高い評価を裏付けるものであった。そうした誘いが10年後にやってきたのであれば、疑いなく彼は受け入れていたであろう。だが、やがてゼセッションもまた解体していったのである。

マッキントッシュ夫妻がメインズ・ストリートからグラスゴーのフロレンティンテラス（後

にサウスパーク・アヴェニューと改名)へ引っ越したのは、1906年のことであった。彼らの新居はずんぐりした、変わりばえのしないヴィクトリア朝のテラスハウスの末端にあった。マッキントッシュはそこに新しいドアを付け、妻壁にいくつかの窓を開け、インテリアを改築した。

すべての家具、暖炉そして照明具はメインズ・ストリートから新居に移され、同じような色彩計画が採用された。マッキントッシュ夫妻の親友の一人、デズモンド・チャップマン・ヒューストンがしばしば彼らの家に滞在し、屋根裏にこしらえた小さくて風変りな客間を占有したのだが、そこにはいわゆる「花いっぱいの小さなバルコニー」が付いていた。さらに、彼はその家を「てっぺんから床まで完璧な統一体」と呼んだ。互いに旅行仲間の間柄であった、ブリッジウオター・ハウスのアリックス・エガートン婦人は、その屋根裏部屋を「世界でもっとも美しい貸間である」、と呼んだ。悲しいかな、マッキントッシュ夫妻は7年間しかサウスパーク・アヴェニューの家に住まず、1913年にはグラスゴーを後にしてイングランドに発った。この家は1918年にW.R.ダヴィドソンによって購入されるまで、そのままになっていた。実は、かつて彼のためにマッキントッシュは1899年、キルマコウムでウィンディ・ヒルを設計していたのであった。ウィンディ・ヒルのすべての家具はサウスパーク・アヴェニューに移されたのではなく、実はきれいな白い寝室の調度や照明具、それに巨大なT字型の樫材の本棚を含む大型の家具の多くがグラスゴー美術大学の地下室に保管されていた。1940年代の初め、私が偶然見つけたとき、それらは無視され、ほとんど忘れ去られたように放置されていたのである。それらは後にハリー・バーンズ卿と私の手によって公開展示されることになった。そして、1947年に、我々は以前大学の会議室であったところをマッキントッシュルームに変えた。照明具や本棚は今もそこにあるし、その他のものは大学のどこかに展示されているはずである。



写真② ザ・ギャンブル・ハウス階段部、1908年
グリーン & グリーン、パサデナ、
カリフォルニア

私がダヴィドソンの家族に初めて会ったのは1940年の秋であった。その頃、私は1941年の3月にグラスゴーのプロヴァンス・ロードシップ・ソサェティで発表するために、マッキントッシュに関する初めての講義の資料を準備していたのである。我々は良き友人となり、私と妻はしばしばサウスパーク・アヴェニュー78番地を訪れたものであった。夕食を御馳走になり、そうそうにいとま乞いをして門のところまで歩いて来ると、間違い無く偵察飛行機のものと思われる爆音を耳にした。30分後、私達はアパートに帰宅する頃、爆発音を聞いた。そしてクライド河沿いを狙った最初の空襲を知らせる照明弾がぱっとあたりを照らすのを見た。その後すぐ、自宅から数分歩いたところにあった、私の好きなクィーンズ・パークのグリーク・トムソン教会が、しょうい弾によって完全に破壊されてしまった。

この経験が、直ちに私をして、ダヴィドソン氏と彼の所有するマッキントッシュの作品の今後の安全性について議論させるきっかけをなした。その結果、彼がマッキントッシュ夫妻の宅地の受託者として、建物、家具、ドローイングなど、当時ほとんど価値無しとみなされたものについて管理することになった。

実は、これらの遺産は、マーガレットの死後もそこに残されていたものであり、1933年のグラスゴーで開かれたマッキントッシュ記念展はダヴィドソンが企画したものであった。

万一、売りに出されにでもすればと思い、私が懇意にしていた二人の長老教授、フォーダイスとウオルトンのオフィスを通じて、大学に対してその建物と中身を保存するための方策としてサウスパーク・アヴェニュー78番地を購入するように申し入れていた。

マッキントッシュの一徹な信奉者であったダヴィドソン氏の人柄については、私が研究作業を進めるうちに、道理に明るく、親切かつ忍耐力のある人物だということが分かってきたが、1945年に亡くなった。翌、1946年に、大学はこの家の獲得交渉に成功し、ダヴィドソンの遺族が家具とドローイングを父親の形見として寄贈した。1946年12月、私は２冊の図版入りの論文を出した。その一つはR.I.B.A.ジャーナルに載った「グラスゴーにおけるマッキントッシュの家」であり、他方は「アーキテクチュラル・レヴュー」に発表された「マッキントッシュの残された家具」であった。これは必然的にグラスゴー大学の賞賛に値する活動や、寛大なるダヴィドソンの寄贈とともに、世間の注目を惹くこととなった。

今日では信じ難いことのように思えるかもしれないが、グラスゴーのデザイナー達、なかでも特にマッキントッシュの貢献が、学術的かつ専門的なグループや一般大衆の間でもしかるべき認識を受けるようになるまでに、何と20年という歳月を要したのである。ヨーロッパでは第二次世界大戦が終結した1945年頃は、大学が１軒の家を美術館にすることなど経済的に不可能なことであった。従って、そこは教官の住宅として使われ、数年間はウオルトン教授とその家族によって住まわれていた。

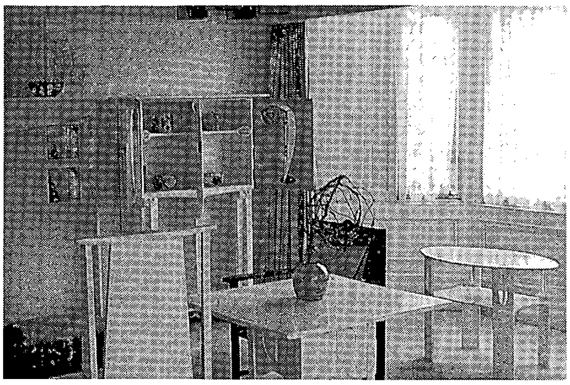
1960年代の前半に、大学はテラス区画全体を取り壊し、新たにハンタリアン・アートギャラリーのための空間の確保につとめた。多くの反対があったにもかかわらず、1963年に実行に移された。しかし、有り難いことには美術史学部のアンドリュー・マックラーレン・ヤング教授が、ハンタリアン・ギャラリーが完成したあかつきには、インテリアについての細かい記録と、パネリングや取り付け部分や調度品を元のままそっくり移管するための手はずを整えてあったのである。グラスゴー大学とその理事者達、そしてどちらかと言えば、もろくてしかも実際無防備ともいえる作品を何とか保管しようとしてきた熱心な教官達にたいして、世間は十分な賞賛を与えてはこなかった。彼らは、ロンドンのウイリアム・ホワイトフィールドといった建築家の助けを得て、1906年のマッキントッシュのインテリアを名実ともに再生したのである。私にとって、こうした事業の展開を観察することは胸の踊る思いであった。つまり、こうした忠実な改築に関わった人々の本当に偉いところは、世界中から訪れる人々がマッキントッシュの家の持つ魔力、つまり内なるリアリティの追体験がそこでできるようになったことである（写真③）。

このマッキントッシュ物語の後段の成り行きは、目まぐるしい変化と経済優先の時代における我々の文化遺産の保存の難しさを物語っており、特に興味ぶかい。この際、いささか個人的な発言をお許し頂きたい。なぜなら、そのほうが話の流れとしては大切に思われるからである。私の著書は８年間ばかりの調査の結果として、1952年にかなりの難儀の末に出版された。出版者からその「チャールズ・レニー・マッキントッシュとモダンムーヴメント」という題は余りにも専門的にすぎ、多分、第一刷が売り切れるにはすくなくとも十年はかかるだろうと言われた。彼らの言うのは正しかった。それから25年後の1977年まで第２版は出版されなかった。やがて、ロバート・ハードと私は、1953年にエジンバラ・フェ

スティヴァルにおいて第１回のマッキントッシュ展を企画した。それは、結果的に英国の建築学校を巡回し、ロンドンではR.I.B.A.に展示され、最後にはケルヴィングローヴのグラスゴー市立美術館に帰ってきた。15年後、アンドリュー・マックラーレン・ヤングが、当時グラスゴー大学の美術学部リッチモンド・プロフェッサーの職にあり、マッキントッシュ生誕百年祭にあたる1968年に大規模な記念展を、再度エジンバラ・フェスティバルのために開催し、その折りに優れたカタログを出している。その展覧会はロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート美術館、そしてウィーンへと巡回された。このとき、ロバート・マックロードはマッキントッシュの同時代人が彼の作品と哲学に対して与えた影響力について注目すべき著書を出版した。そしてハリー・バーンズはグラスゴー大学のコレクションとなっている家具に関する、素晴らしい白黒の写真集を出した。

私達は1950年、グラスゴー・シテー・コーポレーションにイングラム・ストリート・ティールームを購入するように説得した。結果的にはティールームは閉じられ、他に貸されたり最終的には取り壊された。しかし、そのインテリアと中身は、将来グラスゴー美術大学の拡張に合わせ、元あったとうりに使うために記録、保存された。それらは現在、グラスゴー美術館の一部に収められている。ハンターリアン・アートギャラリーにあるサウスパーク・アヴェニューのインテリアの華麗な再現が1982年に公開された。同様にモデル・ケースとしてのウィロウー・ティールームについても、将来のイングラム・ストリートの復活にたいする一般の支持も、もしそうした事業が好ましいとみなされれば、決して得ることは困難ではなかったはずだ。

ヒル・ハウスを1952年に購入していたT.キャンベル・ローソンは家具といっしょにまとめて、その保存を確約してくれる組織ならどこへでも売りたいと、1971年に申し出た。翌年、スコットランド王立建築家協会が購入のための保証基金を募り、美術館としてよりもむしろ貸間のある住宅として維持するためのトラストを設立した。国家的な記念碑としてのその重要性は1982年に認知され、一般に公開される美術館としての維持・保管責任を、スコットランド・ナショナルトラストが持つことになった。たとえ今まで述べてきた事柄は過去40年間に起こった事のほんの概略に過ぎないにしろ、マッキントッシュの歴史的立場の実証を試みる学者やその他の人々の努力にも拘らず、実際、マッキントッシュの名を広めたのは、一脚の椅子が売れたという商業的な分野でのはたらきかけによってであった。



写真③　メインズ・ストリート120番地にあったマッキントッシュのフラットの客間。
1982年に、グラスゴー大学、ハンタリアン・ギャラリーにおいて復元された。

1973年に、サザビーはグラスゴーのニッツヒルにあったクランストン女史の住宅、ハウスヒルからの椅子を競売にかけた。これはあるアメリカ人コレクターによって9,300ポンドで落札された。その後の紹介記事によって、いたるところの美術商やコレクターの注目を浴びることとなり、マッキントッシュの名前は一晩にしてニュースとなった。

同年にはまた、あるイタリアの会社がハンタリアン・ミュージアムとグラスゴー美術大学所蔵のマッキントッシュの家具を、注意深い調査資料に基ずき、複製を始めた。そして

チャールズ・レニー・マッキントッシュ・ソサェティがパトリシア・ダグラス女史を名誉幹事として設立された。

1979年、サザビーがマッキントッシュの書き物机を89,000ポンドでグラスゴー大学に売却したが、当時の新聞報道によればこの価格は今世紀の競売にかかった家具として支払われた最高の額であった。ロジャー・ビルクリフはマッキントッシュの家具についての、素晴らしく緻密な「解説付きカタログ」を出版した。そして、クリスチーズは翌年30,000ポンドで小型の白い卵型テーブルを売りに出した。海外での最初の主だった取り引きは1983年から84年にかけて起こり、その時期、カナダ連邦は、サザビーズがカナダのヴァンクーヴァーで発掘したマッキントッシュの家具5点をモナコで競売にだすところを、カナダの文化財の一部として保存するために差し止めた。これらの家具は、実際、55年以上も前に行方が判らなくなっていたものだ。結局、トロントの王立オンタリオ美術館によって購入されたこの5点とは、ベッド、洗面台、ミス・クランストンのハウスヒルにあった白い寝室の化粧台と鏡、サウスパーク・アヴェニューの応接間にあったものとよく似た白いキャビネットであった。取り引きされた購入価格はおよそ602,000ドル、ポンドで言えばおよそ300,000ポンドを越える額であった。

過去10年間、私達はグラスゴーのデザイナーに関する著書や論文の夥しい数の出版を見てきた。さらに、マッキントッシュの「お土産」やそうした類のこまごましたものの氾濫，そして「それを真似た」家具の製造も。明らかにマッキントッシュの名前と作品が商業分野においてもてはやされるにつれて、一つの崇拝の対象となる危険性が出てきた。しかし、これを防ぐ手立ては何もないのが実情である。

一方、イタリア、スペインそしてカナダにおいて、一般大衆にも手の届く、正真正銘の複製を造ろうという試みが、責任ある人々によってなされつつある。この分野のパイオニアとも言うべきフィリッポ・アリソンは、建築家でナポリ大学の教授でもあるが、1974年に椅子のデザイナーとしてマッキントッシュに関する優れた白黒図版本を英語で出した。アリソンはイタリア大手会社のデザインコンサルタントもしており、そこからは世界中に複製が配給されている。ロジャー・ビルクリフもまた、スペインにある会社のデザインコンサルタントをしている。従って、我々はそうした製品は品質の良い、しかも実物に忠実であると確信している。先の二人と同じような立場で、私自身はマッキントッシュの熱心な礼賛者であるオーストリアのクラフツマンの経営する、トロントにある会社に協力している。

実物は極めて数が少なく、たいがいその値段は普通の購入者にしてみたら余りにも高価すぎるので、広く大衆が求め得る品質の良い複製を本当に望む声があるようだ。しかしながら、そうした全ての品物には、将来、複製品が本物と間違えられるような場合に懸念される詐欺行為を防ぐ為にも、作者の銘を入れておく必要があろう。

これまで述べてきたように、マッキントッシュは1900年代初め、オーストリアにおけるモダン・ムーヴメントの発生に深い足跡を残した。しかしながら、いくつかの個人的な理由からそうした勢いを保持することは出来なかった。さらに、ゼセッションのメンバーのなかにも深刻な亀裂が生まれ、ホフマンの中心的な支援者であったフリッツ・ヴェルンドルファーはマッキントッシュ夫妻がグラスゴーを後にしたその年、1913年にアメリカに移住してしまった。1914年の第一次世界大戦のぼっ発は国際的なレヴェルでの文化的な交流を著しく妨げたのである。結局、グラスゴー・スタイル、ゼセッションそしてアール・ヌーボーは、結局、短命に終わり、現実には戦争を生き抜くことは出来なかった。

1920年代は新しい哲学、新しい素材、新しい建築技法、インダストリアルデザインそしてアール・デコと呼ばれている新しい様式の出現を見た。それらの証人となったものが、バッセト・ロウクのために造ったマッキントッシュの作品や建築設計のなかに認められる。

当時の建築構法のうち、主流になるものと派生的となるものの二つの流れにはっきりと焦点を絞るならば、私は1920年にデザインされながら、実現しなかった事業に関する２点の図面を選ぶことができる。まず最初はミース・ファン・デル・ローエのガラスの高層ビル。これをある人は不気味だと言うかも知れないが、来たるべき形の先ぶれとして真に注目に値する。その二番目には、ロンドンのチェルシーの工房住宅に見られるマッキントッシュのロマンチックな構想の発表例である。1980年代を腑観して、没個性的な建物、特に高層建築についてうんざりした今日社会は、身近な伝統的な要素がモダンな素材と目をみはる色彩構成と組み合わされることにより現れた新しい様式、つまりポスト・モダニズムの観点からみて、間違いなく言えることは、大衆も多くの専門家達も、視覚的内容においてミースのガラスの高層ビルよりもチェルシーの構想の方を好むであろう。将来、我々はこうした流れが幾つも生まれ、そしてマッキントッシュの建築言語にある内的なリアリティが実際の外的表現として十分に実現を見るためにも、より人間的な環境の創造につとめることが急務とされている。

註：

この翻訳は、著書 Thomas Howarth の *Charles Rennie Mackintosh: The Internal Reality of Buildings* に基づくものである。この論文はマッキントッシュソサエティの10周年記念論集、*Mackintosh & His Contemporaries* ed. Pattrick Nuttgens (London, John Murray 1988) のなかに収録されている。

（平成２年10月15日受理）